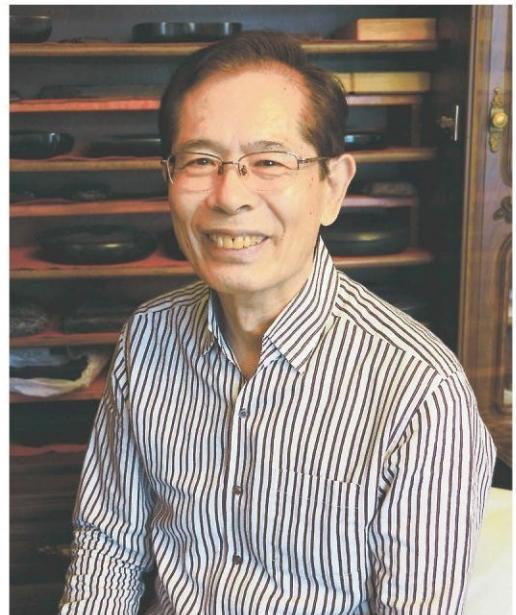


欠な「用の美」としての緊張感も意識、墨を磨く部分は平面を追求した。



県美大賞に選ばれた

宮川
英明さん

「まだ工芸家としては駆け出し。受賞は想像もしていなかった」。応募4度目でつかんだ栄光に驚くが、過去3回は入選・入賞を果たした実力の持ち主だ。

研究心がうずいたのだろう。インターネットで無形文化財保持者の作品を見て技術を研究したり、硯に関する博士論文を入手したり。これまで18回挑んだ公募展では研究会にも出席し、普段教えを請つた。

材料となる石を掘りに長崎・対馬へ渡り、道具のノミも手作りする。完成形を思い描きながら砥石で磨く時間は「無の世界。2時間くらいすぐにたつ」。途中で石が割れて落胆することもあるが「予期せぬ出来事は自分を成長させる」と向

上心にあふれる。
伝統工芸諸工芸展でも上位入賞と今年は賞に恵まれた。「研さんを積めば、さらには硯の奥深さが見えてくるはず。少しでも伝統工芸士の技に近づきたい」

3人の子は独立し、玉名市で民生児童委員をしながら妻(68)と暮らす。73歳。（魚住有佳）

人
ひと